

主催者あいさつ

～水源の里の再生システムを求めて～



現在、過疎・高齢化が進み、コミュニティ活動が困難な状況に直面している集落「水源の里」が全国各地に拡大しています。

昨年１０月、京都府綾部市で開催された第１回「全国水源の里シンポジウム」は、水源の里の問題を広く国民に知らしめる契機となり、その反響は大きいものでありました。

また、限界集落を「水源の里」と名付け、いち早く支援を始めた京都府綾部市の呼びかけにより、昨年１１月には趣旨に賛同する北海道から鹿児島まで１４６の自治体により「全国水源の里連絡協議会」が発足いたしました。

今回で第２回目となるシンポジウムは、水源の里の再生に取り組む住民、研究者や自治体関係者の方々が集い、現行の過疎法が平成２１年度末で失効するのを踏まえ、水源の里の再生に向けた具体的な施策等を議論し、その取り組みを全国にアピールするものであります。

水源の里は、文字通り命の水の源を守っており、国土保全や環境面で重要な役割を果たしています。荒れた山は渇水や水害を発生させ、下流域の都市住民や漁業者の生産と生活にも悪影響を与えており、この問題は山間地の住民だけではなく、社会全体で考え対策すべき課題です。

このことから「全国水源の里連絡協議会」では、「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」という理念のもと、この運動を推進するため全国の企業や個人から寄付を募る水源の里基金の創設、過疎地域自立促進特別措置法の失効をふまえて新たな過疎対策を検討・提言する検討委員会の設置や国会議員・国等へ対する要望行動などを行ってきました。

２００６年に国土交通省が、過疎地域を抱える全国７７５市町村に対して過疎集落等の状況調査を行った結果、１０年以内に消滅の可能性がある集落が４２２集落、いずれ消滅する集落が２２１９集落、合わせて２６４１集落あることが報告されました。

これを喫緊の課題としてとらえ、消滅の可能性がある集落を存続させていくためには地域われわれは何をしなければならないのか、その方向性を早急に見いださなければなりません。

手をこまねいて見ているだけでは何の解決策にもなりません。このシンポジウムをとおして、上流と下流の関係に基づく流域連携の必要性を全国にアピールするとともに、流域間や他市町村との情報交換、交流・連携を通じ、集落の再生に取り組んでいかなければなりません。

今回のシンポジウムが起爆剤となり、さらに大きな流れとなって、この運動が全国に展開し、水源の里の再生システムが構築されることを切に願うものであります。

平成２０年１０月２８日

全国水源の里シンポジウム in 喜多方 実行委員会
実行委員長 喜多方市長 白井 英男